
建築式典はセレモニーではなく、フェスティバルである

The construct ceremony is not ceremony, but it is festival.

JEPC イベント総合研究所研究員

藪花 健一

Jepc Event general laboratory Advanced Researcher Kenichi Yabuhana

はじめに

イベント会場で行われるアンケートやイベント各種の組織や会における、入会または更新の申し込み時などにおいて、用紙に記載された、回答者や会員の担当業務分野という設問の選択肢を見ると、「博覧会」、「見本市・展示会」、「コンベンション」、「文化」、「フェスティバル」、「スポーツ」、「販売促進」という分野が、たいがい並んでいることが多い。私は、長年の間、建築式典を中心にいろいろな式典に携わってきたのだが、その担当業務分野の選択肢の中には、今だかつて、「建築式典」か「式典」という項目が、あった例は、誠に残念ながらないのである。

そしてもう一つ残念なことを書かせて頂くと、建築式典のことが書かれている「建築工事の祭式」という本をめくってみると、そこには、『祭式は、イベントではない。神職が神々をお迎えして執り行う、厳粛な神事である』¹⁾と、私にとって大変にショックなことが書かれているのである。実を言うと私は長年の間、建築式典を主に多くの式典に携わってきており、すっかりイベント屋気どりでいたのであるが、この二つの事実からすると、私が今まで数多く、一生懸命携わってきたものは、単に“祭式”というものであり、“イベント”とは言えない行事に携わっていただけということになるのである。

単にイベントではないから、イベント担当業務分野の選択肢に「式典」という選択肢がないのであろうか。私はイベント業界にいたはずでは、なかったということなのだろうか。正直に言って、

このことを考えてから、私は、ずっと後ろめたい疑念を抱き続けてきているのである。

そこで今回、この疑念に白黒を付けるうえでも、私はここで、「建築式典」がイベントなのかどうか、改めて考えてみて、決着を付けたいと強く思ったのである。

研究の背景

そもそもイベントとは、いったい何であろうか？日本イベントプロデュース協会総合研究所の小坂善治郎所長は、『“であい”や“ふれあい”を大切に守りながら、そこに新しいコミュニケーションの場と機会を育むものがイベントである。』²⁾とイベント研究第3号で述べている。そして、日本イベントプロデュース協会のホームページに記載されている「イベント憲章」のところにも、『イベントは、何らかの目的を達成するための手段として開催される直接的なコミュニケーションメディアである。』³⁾という一文が載っている。

ここで改めて考えてみたいのは、建築式典にも、施主、設計者、施工関係者や来賓といった方々の間に“であい”と“ふれあい”が神事とそのあと執り行われる“直会(なおらい)”と呼ばれる祝宴の中にはあり、そこで、お互いが新しく出会った人とコミュニケーションを育んでいる光景をよく目にすることができるのである。これだけでは、小坂氏の書いているイベントと言うには何かもの足りないのであろうか。そして、「建築工事の祭式」に『工事関係者が一層仕事に励む心構えを持つ機会として、建築工事の節目の祝事となっている』⁴⁾と書かれている建築式典は、憲章に照らしても、

一層仕事に励む心構えを持たせるという目的を達成するための手段となっているのだから、この部分に照らし合わせてもイベントと言えるのではないだろうか？

まず、ここで考えてみたいのは、なぜ、一層仕事に励む心構えを持つということのために「建築式典」というものを執り行わなければ、ならないのであろうか。

そこで、図1をご覧になって頂きたい。

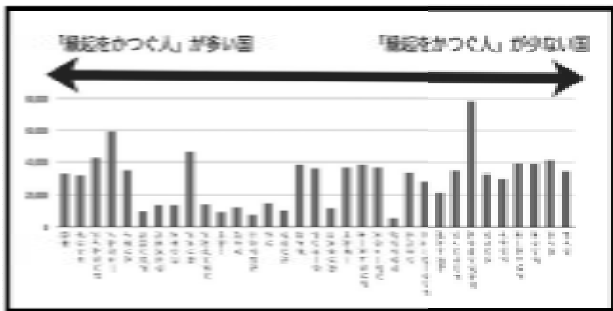


図 1. うつせみ日記 (Utsusemi Nikki)2010 年 3 月 17 日 (<http://d.hatenena.jp/hidematu/>)

インターネットのブログ「うつせみ日記」の著者によると、『グラフの左側が「縁起をかつぐタイプ」と答えた人の多い国になっています。(中略)。日本がもっとも縁起をかつぐと答えた人が多い国となっており、その他4カ国までは高い PPP (一人当たりの購買力平価、筆者加筆) となっています。逆に「縁起をかつぐタイプ」と答えた人が少ない国である右側の国は全体的に PPP が高くなっています。』⁵⁾とブログには書いているのだが、言い方を替えてみれば、縁起を担ぐ人が多いということは、日本人には神を信じる人が多いということにはなりはしないだろうか。そして、建築式典を行う理由にこういうことが挙げられはしないだろうか、『縁起や験担ぎは担ぐ人のモチベーションをあげることができるため、「縁起を担ぐ事によって自分の気分を乗せる」ことが目的なのではないでしょうか。茶柱など、何かの切っ掛けをポジティブに捉えて、勝負や物事が上手くいくと自分自身に暗示をかけることで前向きになれることから、実力も発揮しやすくなると言えます。また縁起を担ぐ行為は不安感から生ずる心理

的緊張を解消し、精神的に安定しますので、自己調整作用も持っていると言われます。つまり縁起を担ぐという行為を、自分の気持ちを上手くコントロールできるよう、不安定な状態から脱出するためのツールとして使用するのです。さらには懸賞の当選など、本人の努力ではどうしようもない場合なども、せめて縁起を担ぐことで、自分の気持ちを納める場合もあるでしょう。受験なども、万事は尽くしたのであとは神さまにもお願いしておこう、といった、できることは何でもしたいという焦燥感を少なからず解消してくれることになります。』⁶⁾と、他の「縁起を楽しく担いでみよう」というブログにも書いてある。

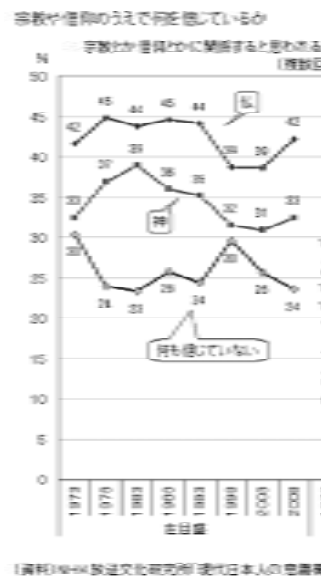


図 2. 「世界実情データ図録」<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/>)

図2をみても分かる通り、7割近い日本人が、神や仏を信じており、2割近い日本人が、“お守り”や“おふだ”の効果を信じているのである。

つまり、建築工事というひとつ間違えば、人の命に関わる事態が起きかねない危険が多い作業の中で、冷静で安全に進めていくために日本人は工事の節目に多くの儀式を行い、神のご加護を得て、安心して作業をしていきたいと願っているのではないだろうか。

・研究の目的

前述したように、フェスティバル=祭り、祭典は、イベント担当業務分野の質問において、選択

肢の項目にあり、イベントとして認知されているのであるが、では、そのフェスティバルの定義とは、いったい何であろうか。

インターネットのフリー百科事典「ウィキペディア」で調べてみると、『フェスティバル (festival, fest(s))・フェスタ (festa, Festa) とは、英語で (宗教的な) 祭礼・祭典・祝祭や祝祭日のこと。転じて、世俗的な催事のこと。(中略) フェスティバルの語源は、ラテン語の festivus にある。』⁷⁾とある。つまり、宗教的祭礼である「建築式典」は、間違いなくフェスティバルであると言っても間違いはなさそうなのである。そして、フェスティバルがイベントであるということが、イベント業界で既成事実となっているならば、三段論法を使って、みても、「建築式典」だってイベントと言っても間違いはないのではないかと。

だがここで、「建築式典」が「祭り」であることに異議を唱える人もいるのではないだろうか。確かに、「祭り」というと、普通は賑やかで多くの人出で賑わうものを頭に思い浮かべる人が多いであろう。ひっそりと一定の人のみが参列する「建築式典」は「祭り」とは言えないのではないかと、こう考える人がいるのも、うなずける話である。

そこで、私はここで、建築式典が、ちゃんとした「祭り」であること証明したいと思ったのである。

・ 研究の方法

民俗学者の菅田正昭氏は、「日本の祭り 知れば知るほど」の著書の中で、『日本列島に住む祖先たちは、神々は身近で見守ってくれていると思いつつも、いつも同じ場所にとどまっているとは考えていなかったようだ。神々は何処(どこ)からか時を定めて寄り来るものと思ひ、神々の訪れを「待つ」のが「祭り」の起こりだったのだ』⁸⁾と書いており、さらには、『「岩波古語辞典」によれば、マツリとは「神や人に物をさしあげるのが原義」とあり、「広辞苑」によれば、「奉る・献る」は「さしあげる。たてまつる」の義、「祭る・祀る」は「供物・奉楽などをして神霊を慰め、祈願する」の義、とある。』⁹⁾とも書いている。まさしく人が集い、

供物を供えて神の訪れを待ち、寄り来る神に祈願する「建築式典」のことを指していると言えるのではないかと。

さらに菅田氏は、『現代では、祭りというと、賑やかな人出が想起され、町興しなどのフェスティバルにもなっているが、本来は神事であり、神道の根幹である。』¹⁰⁾とも書いている。

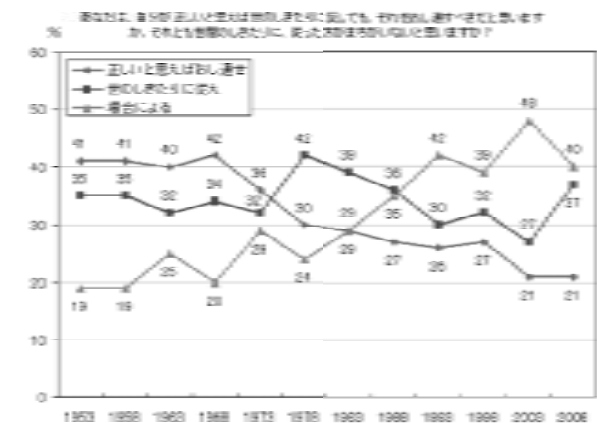
その神事である建築式典の歴史は古く、『弥生時代の大规模集落と確認された大阪府の池上曾根遺跡では大型の高床式建物の棟持柱の柱穴から勾玉が出土したが、これは柱を立てるに際し、祈りを込めた印と考えられる』¹¹⁾と「建築工事の祭式」には、書いてあるのである。

このことから分かるように、「建築式典」は、今から1,700年も昔から日本のあちらこちらで、連日のように行われてきているいちばんポピュラーな祭りなのである。

つまり「建築式典」は、祭りであり、祭りであるということは、イベントなのである。

「建築工事の祭式」に『人の一生は儀式との関係が密接である。誕生後の宮参りから始まり、還暦など人生の節目の儀式がある。建築工事でもこれと同様、古くから伝承された習慣によって儀式が執り行われている。』¹²⁾と書いてあるが、一般的に言われているお祭り同様、「建築式典」にも決

AVDの傾向を重視する傾向



(注) 日本には歴史的に「世間体」「常識」があまりなくて、1953年から1998年までは「常識」が重視されていた。(資料: 経済学研究所「日本人の国民性調査」)

図3. 「世界実情データ図録」<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/>)
まり事や作法のなかに古くからのいろいろな伝承された習慣があるのである。

図3にあるように、日本人は、3人に1人の人

が、世のしきたりに従うべきであると考えているのである。さらには、「建築式典」のような特別な場合、7割から8割の人が、世のしきたりにしたがうべきだと考えているのである。

ここに「建築式典が、それこそ1,700年もの長い間、執り行われてきた理由があるのであり、その中の作法や決まり事にも、ずっと受け継がれて、守られてきた習慣があるのである。

そこで「建築式典」の式次第に沿って、どんな古くから伝承されてきた習慣がそのなかにあるのかを考えていき、「建築式典」が、大切に受け継がれていかなければならない、日本古来からの「祭り」であることを検証してみたいのである。

ただし、日本の「建築式典」の多くは神式であることが、昔から多いので、ここでは神式の式次第に沿って、考えていきたいと思う。

・研究の結果

1. 準備

「建築工場の祭式」に、『古来より人々は暦を見て初めて、当日の日柄(ひがら)を知り、その日やこれから先の農作業や婚礼などの生活設計を立てていた』¹³⁾とあり、現代でも建築式典を行う場合に、まず日時を決める時に暦の六曜(先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口)を用いる。明治の初めに、神仏分離、暦も太陽暦に変わったのだが、変わったあともずっと、今でもこの旧暦の六曜によって式典の日取りが決められているのである。それにしても仏滅がある暦で神事の日取りを決めるとは、少し変なのだが、それほどにもこの暦というものが日本人に浸透しているのである。

また式典の会場を設営する場合、会場の周りに紅白幕を張り巡らすが、この赤白という色は、中国の五行思想に由来しているのである。

「日本人 数のしきたり」という本に、『吉事には紅白の幕を張ったり、紅白の水引をかけた贈り物をしますが、五色によれば、赤は火を表し、すべてを焼き尽くしてケガレを消滅させるという意味が込められています。また、白は無垢な清廉潔白を表しており、ハレの祝い事を象徴している

のです。』¹⁴⁾とあり、これも日本人には、昔から浸透しているのである。確かにこの赤と白の組み合わせは、日本の国旗もそうであり、まさに日本の美しさを象徴するものである。

2. 手水

手水は、「建築工場の祭式」に『これは祭場へ入る前に行く、手を洗い身を清め、口を洗い心を清めるもの』¹⁵⁾と書いてあり、これも日本人ならではの作法といえる。国学院大学の三橋健教授の著書「神道の本」には、『肉眼で見えない罪や穢れを清める神道的な行法を禊・祓えと呼ぶ。神道では清浄を重視する。同じように日本人は清潔好きな民族である。』¹⁶⁾と書いてある。日本人は風呂が好きで、衣服を毎日取り替えて洗濯している人が多いのも日常生活における「禊祓(みそぎばらい)の行為」だと書いてある。ここで、頭に思い浮かぶのが、日本の国技である相撲であり、『土俵に上がり、一礼し、四股を踏んだ後に、前の取組で勝った力士から柄杓で力水をつけてもらうが、これも約1200年前の平安時代の相撲節会の頃から行われてきた』¹⁷⁾所作であるが、これも手水と同様に、神聖な場所に入る前に身を清めるという、日本人の文化のひとつなのではないだろうか。

3. 着席

式場では、祭壇の真正面を正中といい、神様が通る道になるので、そこには誰も座ることができないのである。そしてその正中の左右に上座と下座がある。



図4. (「建築工場の祭式」学芸出版社59頁より)

この上座と下座の考え方について、「建築工場の祭式」の中では、『参列者の席順：神前に向かって右側から神前に近い列が上座(建築主および来

賓)となり、中央正中に近い方が上座となる。』¹⁸⁾と書いているが、ここには、なぜ、右側が左側より上位になっているのかは、残念ながら説明がないのである。そこで、インターネットで検索して、剣道家の佐々木博嗣氏のブログ「はくどー庵」を覗いてみると、そこに、『現代剣道の世界では、原則として正面席に対して向かって右側を上座、左側を下座とする習慣があります。これは古代中国の「天子南面す」という考え方に因っているものと考えられます。つまり天子様のような地位のある方の御席は北の方角に南側を向いて据えられるのが基本とされ、その天子様の左手、すなわち向かって右側は日が昇る東となるため上座とされ、その反対側となる西は下座とする考え方です。

この考え方は、おそらく天文の中心となる北極星を背にすることによって、天子様の後ろに世界の中心となる北極星が煌々と輝くというようなイメージによるものではないかと思えます。』¹⁹⁾とある。おそらくこの考え方が日本に伝わり、式典においても、祭壇を北の方角に南側に向けて設置して、正中を挟んで東側を上座、西側を下座として、正中に近い席を上位とする席次が定着したのではないだろうか。

4．開式

前述のとおり、菅田氏は、『日本列島に住むわれわれの先祖たちは、神々は間近で見守ってくれていると思いつつも、いつも同じ場所にとどまっているとは考えていなかったようだ。神々は何処(どこ)からか時を定めて寄り来るものと思い、神々の訪れを「待つ」のが「祭り」の起こりだったのだ。』²⁰⁾と書いている。実際式の始まる前には、失礼のないよう、出席者は静粛に神の訪れを待つのである。

5．修祓

修祓とは、「建築工事の祭式」に『祭壇に神々を迎えるに当り、神職が祝詞(はらえことば)を奏上し、祓い清める』²¹⁾儀式とある。要はいよいよ神様をお迎えするにあたり、しばらく居てもら

場所を掃除するのである。

この祓い清める時に神職は、大麻(おおぬさ)という神の枝に半紙で作った稲妻のような紙を麻の紐で結びつけたものを使う。このことについて、『神職が罪穢れを祓う大麻(おおぬさ)は、我々が掃除をする時に使うはたきと共通する。』²²⁾と「決定版 知れば知るほど面白い! 神道の本」に三橋氏は書いている。確かにパタパタ叩いて汚い誇りを落とすという点を考えると似ていると言っている。普段何気なく使っているはたきであるが、こう考えると日本の文化のひとつなのである。

6．降神の儀

「建築工事の祭式」では、『祓い清められた祭場へ神々をお迎えする儀式である』²³⁾とあり、お迎えするということは、神様はそこに、まだ居られないのである。古代の日本には、神社などなく、「日本の祭り 知れば知るほど」で菅田氏が書いているとおり『神は漂うように定住せず、人の招きに応じて来臨』²⁴⁾していたのである。ここがキリスト教やイスラム教いったと宗教と違うところであり、『神降ろしをするのは、神社という建築物が発生する以前の祭りの名残である。』²⁵⁾と菅田氏はいう。だから現代、神社で式典を執り行う場合には、この「降神の儀」というものはない。その代わり式場の扉を開けて、式場の中に入ってもらえる場合がある。

また、「知れば知るほど面白い! 神道の本」で三橋氏は、『神道の神は、いくつかの特徴がある。そのひとつは「八百万の神」といわれるほど数が多いことである』²⁶⁾と神道における神の特徴を指摘している。つまり老木にも古い建物にも井戸、山やそのほか家の厠や台所など数多くの場所に神が宿っているというのである。だからたとえば、井戸の跡がある敷地で地鎮祭を執り行う場合など、建物が建てられる場所とは別の井戸の前にも祭壇を組み、別途お祓いをするのである。

7．献饌

献饌とは、『降神の儀で、迎えた神々に、お願

いごとをするに当たり、米、酒、塩を始め、山海の珍味のご馳走でもてなす意味がある。』²⁷⁾と、「建築工事の祭式」には書いてある。だいたい祭壇に酒、塩、米、水、餅、鯛、野菜、乾物を供え、場合によってはそれに果物とらくがんも一緒に供える場合が多いが、当然それは、その地元で採れたり作られたりしたものを供えるのである。わざわざ遠いところをお越しいただいたわけであるから、自宅に遠方のお客を迎える時と同じに、その土地でしか味わえないもので歓待するのである。特殊の例としては、「知れば知るほど面白い！神道の本」の中で、三橋氏が、『長野県の諏訪湖の周辺にある諏訪大社の上社本宮(もとみや)の御頭祭では、鳥と鹿肉、そして鹿頭が供えられる』²⁸⁾例を挙げている。また三橋氏はもう一つの意味として、『これは、食べ物を得られたことを神に感謝し、神に供えた食べ物がこれからも豊富に手に入れられるように神に祈願しているのである。』²⁹⁾とも書いている。この神や人に物を差し上げる意の「奉る」も「まつり」につながっている。

8．祝詞奏上

祝詞奏上とは、「建築工事の祭式」によると『神前で、齋主が工事の安全や建物の安泰を祈願する儀式である（竣工時は、特に神々に対しこれまでの加護に感謝の詞(ことば)を読み上げることとなる。』³⁰⁾とあり、要は参列者の代わりに齋主(神職)が神様をお願いをすることである。神の言葉を神父や牧師が参列者に説教するのと違う点を、『聖書は神や聖人の言動を記しているから、神父や牧師は神を背にして、人に向かって言うが、祝詞は齋主が人々を代表して神に申し上げる言葉である。』³¹⁾と書いている。だから齋主(神職)が祝詞を読み上げる間は、参列者は起立し、神前に頭を下げる状態である。またこの間は、カメラでの撮影を拒否する齋主(神職)も多いのである。いわばここが、式典では、いちばん重要な儀式なのである。

祝詞奏上の時、齋主(神職)は、懐から祝詞文が書かれた紙を取り出して、それを読み上げるが、

この祝詞文は、『平安時代に作られた祝詞が今に伝わっている』³²⁾もので、漢字ばかりの漢文みたいな文面であり、読み上げるのを聞いていても、高校生の古文の本に書いてある文章を聞いているようで難解である。

ちなみに、神にお願い事を申し上げるの「申し上げる」は、「献(まつ)る」の意であり、これも「まつり」につながっている。

9．清祓いの儀

清祓いの儀とは、『神の力で、敷地全域の禍神・悪霊・邪霊の類を退散させ、また穢(けが)れを除く儀式である』³³⁾とあり、要は悪魔祓いをする儀式である。日本の東側の地域では「切(きり)麻散(ぬささん)米(まい)」西側では、「四方祓い」と言う場合が多い。要は、麻、半紙を小さく切り、これに米、塩を混ぜ合わせたものに酒を垂らして、桐の箱の中または三方の上に載せておいて、清祓いの儀の時に祭壇の周り(場合によっては、式場の周り)を北東から時計回りに四隅撒いて、祓っていくのである。この儀式は清潔好きな日本人と関係があるという。衣服を毎日変える、入浴する、洗濯するといったことが身や心が清められて、すっきりとした気分になると同様に、神道の基本理念である禊祓の観念は、清潔好きな日本人の行動と深く関わっていると、「知れば知るほど面白い！神道の本」で三橋氏は書いている³⁴⁾のである。

10．行事(地鎮、上棟、発進、点灯等)

ここでいよいよ建築式典は、クライマックスを迎える。ここで行う行事は、『各祭式ごとに異なる形態で執り行われる唯一の式次第である。』³⁵⁾とあり、地鎮祭では、「地鎮の儀」として、鎌・鍬・鋤入れの儀式が行われたり、上棟式では、「上棟の儀」として、棟になる鉄骨(木)を上へ引き上げる「曳綱の儀」や鉄骨を鋸で止める「鋸打ちの儀」などが行われる。さらには、竣工式では、機械や設備の「発進の儀」、ネオン看板や電気設備などの「点灯の儀」などが行われる。要は建築式典に花を添えるイベントであると言っているのではない

か。事実この行事には、神道としての宗教的な意味合いはないのである。仏式の式典でもあるし、キリスト教やイスラム教の建築式典においても鍬入れの儀はあるし、高速道路などの建築式典をやる場合も「鍬入れ式」として行う場合が多い。

日本国際教養大学の副学長だったオーストラリア人のグレゴリー・クラーク氏は、中国網日本語版(チャイナネット)で、日本人特徴を13の項目にまとめ、発表した³⁶⁾が、そのなかの一つに、「チームワーク意識が強く、身内だけでやるような家族企業の管理に長けている」点を挙げているが、ここでいう行事においても、私が経験してきた中では、実にすばらしいチームワークや連携を見せてくれる場合が多い。施主、設計、施工の代表と補佐役、裏方、進行係が事前に打ち合わせやり取りを重ね、本番では、滞りなく終了させるのである。

11. 玉串奉奠

玉串奉奠とは、『神に謹んで玉串を奉り、神を敬い改めて祈念する儀式である。』³⁷⁾とあり、この時、玉串を捧げたあと、参拝者は、「二礼二拍手一礼」いわゆる2回お辞儀をして、2回拍手を打ち、最後にもう一度お辞儀をする。なぜ2回なのかというと、「日本人数のしきたり」で飯倉氏は、『陰と陽の二対を表すとともに、古代中国より尊いとされてきた奇数ではなく、二という偶数を用いることで、神々ではなく人間が祈りに来たことを伝えるためだと言われています。』³⁸⁾そして、『古来、神に捧げる食事はカシワの葉を編んだ食器を用い、神々に食事を捧げる合図として二拍の手打ちを行いました。』³⁹⁾と書いている。これは、火の用心の見回りが声をあげて町中を練り歩きながら、拍子木を2回打ち鳴らすことや相撲で力士が打つ拍子も2回であるのと同様であるという。『「食事ができあがりました。召し上がりください」から、「お願いに参りました。どうかお聞き届けください」という合図になったともいいます』⁴⁰⁾とあり、古来から伝わっている作法のひとつである。

12. 撤饌

撤饌は、『献饌で供えられた神饌を取り下げる儀式』⁴¹⁾であり、取り下げた神饌を撤下神饌(てっかしんせん)というのである。撤下神饌は神様が召し上がったものであり、捨てずに、必ず食べるのが原則である。食べることにより、神様から力を頂くというのである。

13. 昇神の儀

昇神の儀は、『お迎えした神々を元の御座(みくら)へお帰しする儀式である。』⁴²⁾とあり、降神の儀とは逆に、神様を祭壇から元の世界にお送りする儀式である。この時に神職は、「オーオー」という声を出す。この声を「敬蹕(けいひつ)」というが、これは、大名行列が往来を通り過ぎるときに先導の旗持ちが、「下に～、下に～」と言う声とも共通するし、相撲の横綱土俵入りで、横綱が正面を向く時の「すう～」という行司の声とも共通するのである。要は「お静かに」と人々に注意を促しているのである⁴³⁾。

14. 神酒拝戴

式の最後に、神前にお供えをした神酒をかわらけという平皿で、みんなで飲むことをいう。

神前に供える神酒は、必ず日本酒である。たとえば施主が洋酒や焼酎、ビールのメーカーであったとしても日本酒である。これは、日本酒が日本書紀に記述があるほど日本人の間で古くから飲まれているからであり、日本古来からの文化の一つだからである。焼酎は安土桃山時代、ビールは明治維新の時代にならないと日本人が口にすることはなかったのである。

15. 直会

直会とは、『祭場の中で、神酒拝戴を行い、神前に供えたお神酒をかわらけでいただくにとどまらず、会場を移して祝宴を行うこともある。これが直会である。』⁴⁴⁾とある。そして「日本の祭り知れば知るほど」のなかでは、菅田氏が、『今日では酒宴としての色彩が濃厚だが、本来は祭りで神

に供えた神饌(みけ)や神酒(みき)をおろし、祭りの奉仕者や参加者がそれを頂戴し共食するという事に目的があった』⁴⁵⁾と書いている。つまり神の下がりものを皆で食べたり飲んだりして、神と人、そして人々との間の結束を固めたのである。現代でも結婚式や祭りの後にこの「共食」の信仰が生きている。

また、この直会の席では、よく赤飯が出されることがあるが、この赤飯は日本人にとってめでたい席ではおなじみである、『古くは鎌倉時代に宮中で三月三日、五月五日、九月九日の節句の膳に、必ず出されました。つまり古くから「ハレ」の日の食べものだったのです。』⁴⁶⁾とある。

直会の最後は、参加者全員で「手締め」を行い、解散となる。この「手締め」は、『もともとは、争い事でもめた同士が和解する際に、お互いに物騒な刃物などを持っていないことを示すために、指を開いてから拍手したことに始まる』⁴⁷⁾とあり、式典の席とはいえ時には利害が絡むような話が、直会の席で出て、不穏な雰囲気になってしまふこともあったのではないか。そういう風習が残っているためか、直会は、今でも「手締め」でお開きとなることが多いのである。

16. その他

式典が終了した後に、ご奉仕頂いた神職には、お礼として初穂料をお渡しするが、金額としては、3万円が普通で、式典の規模によっては、5万円の場合になることもある。3、5、7と奇数の場合が多いのである。これについて、「日本人 数のしきたり」には、『結婚式などの慶事では一、三、五、七などの奇数がいいとされています。古代中国から始まった陰陽五行説で、奇数は陽でめでたい数字と考えられているからです。ただし、九は「苦」につながるのを避けます。』⁴⁸⁾と書かれている。昔からいいとされている、奇数の金額が初穂料では、今も用いられてきているのである。

式典の帰りに、参列者に対し引出物が配られることが多いが、こういう習慣は、すでに平安時代にあったというのである。「日本人のしきたり」に

よれば、『すでに平安時代の貴族たちの間では、馬を引き出して贈ったということが文献に残っていて、これが「引出物」の語源とされています。』⁴⁹⁾とある。それが江戸時代になり、鯉節や鯛を贈るようになり、現代は、おもにお菓子が贈られるようになっているのである。

初穂料や神前に参列者が奉納する奉献酒、そして引出物には、水引がかけられ、熨斗が付けてある。『昔は人に物を贈ると言えば、心を込めて造ったお酒と、それに魚を添えて贈るのが基本だった。四方を海に囲まれたわが国は古来魚に恵まれ、その鮮魚が後に「あわび」に代表されるようになってきた。したがって「のしあわび」を付けて贈ってきたものは、お酒でなくとも酒の代わりとみなされ、「熨斗」を添えると言うことは、心を込めて造ったお酒を贈ることを意味するようになった。(中略)次に、「水引」であるが、包装した上にかける水引は一見無駄と思われる。しかし水引の結び目は心を結ぶことを意味する』⁵⁰⁾とある。どちらも心を込めているという意味があり、熨斗を添えて水引を掛けて物を贈るということは、日本人の美しい習慣のひとつでは、ないだろうか。

・ 研究の考察

書いてきたとおり建築式典には、実に多くの引き継いでいかなければならない、日本古来からの伝統や習慣が、いっぱい詰まっているのである。これは、能や歌舞伎同様に受け継がれていかなければならない日本の伝統ある文化なのである。そしてそこには、「まつり」の語源となった8個の言葉を見ることができるのである。すなわち

待(ま)つ...祭壇に神が降りて来るのを参列者が祭壇の前でじっと待つのである。「まつり」の語源は、「待つ」なのである。

奉(まつ)る「捧げる、献上する」「神や人に物を差し上げる」...酒や神饌を神前に捧げ、神に献上するのである。そしてその献上したものを直会で参加した者全員で飲んだり食べたりするのである。これぞ、「まつり」の本質だという。献(まつ)る「申し上げる」...神職が祝詞を読み

上げて、神にお願いごとではなく、感謝の気持ちを申し上げるのである。

参(まい)る「参加する」...参列者は、式典に参加をするために会場まで足を運び、また神もどこからともなく舞い降りて来るのである。

祭(まつ)る「儀式を整えて神霊を慰める。神としてしずめあがめる」「賑々しい」...建築式典でも工事の規模が大きく、参列者の多い場合がこちらにあたるのではないか。

祀(まつ)る「神として祭る」「ひっそり」...地鎮祭における井戸のお祓いや竣工式における金庫のお払いなど、内輪だけで参列者にはあまり見せないようなものがこちらに当たると言う。

政(まつりごと)「統治すること、政治」...式典では、今後の工事の方針なども話し合われることもあり得ないことではない。したがって、政(まつりごと)と言える部分もある。

間(ま)つ「一定の時間いる」...間つとは、そこに一定の時間いることであり、建築式典においても式典が終了するまで、神も参列者も待たされるのである。

そしてもう一つ、図5をご覧になって頂きたい。

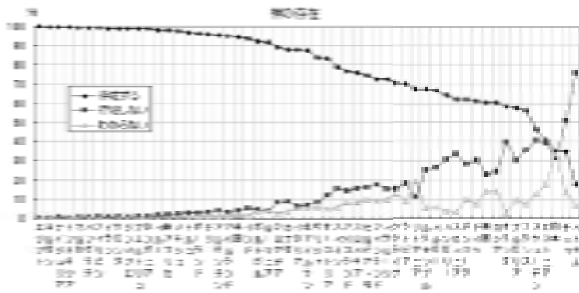


図5. 「世界実情データ図録」<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/>

図5を見ればわかる通り、日本人は、世界の中でも神自体の存在は、信じる人の割合が少ない国なのである。なのになぜ建築工事の節目において、修祓式である建築式典を執り行うのであろうか。

それは、日本人が執り行う建築式典が、礼拝の儀式、祭式や厳粛な神事と言う意味合いだけで行われるのでは決してなく、縁起を担いで関係者のモチベーションを上げるための「まつり」、「フェスティバル」の意味合いが強いものなのだからである。

そう建築式典は、立派な“イベント”なのである。

・今後の課題

景気が低迷してしまい、景気回復の糸口さえつかめていない今の日本の経済の現状では、建設工事の件数は減り、建設費用も削られてしまっており、そのあおりは、式典にも当然及んでいる。式典は、やらないで済ませてしまっているか、やったとしても、規模や内容が、大幅に縮小されてしまっており、建築式典に携わっている我々イベント業者は青息吐息の状態である。かつてのバブルの頃の忙しさを知っている者としては、今の現状は、誠に寂しい限りである。

だが、ここで考えてみたいのは、不景気だから式典が減っている、と考えるのは、「日本人は、世界の中でも神の存在を信じる人の割合が少ない国」という、建築式典に携わる人間にとっては、やっかいな日本人の特質のみに囚われ過ぎているからではないだろうか。“神なんて存在するわけがない”と、多くの人が思っているのだから、建築式典はなくなっていった当然であるというマイナス思考がイベント業界にも蔓延してしまっていないだろうか。それは、建築式典が、祭式、神事だと考えているからである。建築式典は、お祭りであり、フェスティバルであるのだから、こういう状況の今こそ、モチベーションを上げるための手段、祭りとして捉えていくべきではないのか。まだまだ建築式典には、多くの人知らないものがあるのだから。「定礎」、「棟上げ」、「除幕」、「点灯」、「火入れ」、「発進」などといった数多くの祭式があり、その中の行事においても、餅を撒いたり、風船を飛ばしたりはもちろん、インターネットや最近のイベントで使われている、いろいろな装置を使えば、無限大に面白い行事が考えられるのではないか。

今後、この建築式典の無限大の可能性について考えてみたいのである。

注

- 1)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社13頁)

- 2)「イベント研究第3号」(2010年一般社団法人日本イベントプロデューサー協会 日本イベント総合研究所 19頁)
- 3)日本イベントプロデューサー協会ホームページ「イベント憲章より」
(<http://www.jepc.com/index.html>)
- 4)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 12頁)
- 5)うつせみ日記 (Utsusemi Nikki)2010年3月17日 (<http://d.hatena.ne.jp/hidematu/>)
- 6)「縁起を楽しく担いでみよう」
(<http://www.yamano-optical.com/index.html>)
- 7)「フリー百科事典ウィキペディア」
(<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)
- 8)~10)「日本の祭り 知れば知るほど」(2007年菅田正昭、株式会社実業之日本社 16~25頁)
- 11)~13)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 3~18頁)
- 14)「日本人 数のしきたり」(2007年飯倉晴武編著、青春出版社 94頁)
- 15)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 32頁)
- 16)「決定版 知れば知るほど面白い!神道の本」(三橋健 西東社 14頁)
<http://sumo.goo.ne.jp/index.html> 「goo 大相撲 大相撲情報局」
- 17)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 28頁)
- 18)佐々木 博嗣氏ブログ「はくどー庵」
(http://www.hakudoh.com/pc/page06_0702.html)
- 19)~20)「日本の祭り 知れば知るほど」(2007年菅田正昭、株式会社実業之日本社 32・16頁)
- 21)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 34頁)
- 22)「決定版 知れば知るほど面白い!神道の本」(三橋健 西東社 10頁)
- 23)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 39頁)
- 24)~25)「日本の祭り 知れば知るほど」(2007年菅田正昭、株式会社実業之日本社 35・55頁)
- 26)「決定版 知れば知るほど面白い!神道の本」(三橋健 西東社 18頁)
- 27)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 36頁)
- 28)~29)「決定版 知れば知るほど面白い!神道の本」(三橋健 西東社 91・90頁)
- 30)~33)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 38~40頁)
- 34)「決定版 知れば知るほど面白い!神道の本」(三橋健 西東社 14頁)
- 35)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 41頁)
- 36)「サーチナニュース」(2010年7月27日
http://news.searchina.ne.jp/disp.cgi?y=2010&d=0727&f=national_0727_129.shtml)
- 37)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 42頁)
- 38)~40)「日本人 数のしきたり」(2007年飯倉晴武編著、青春出版社 37~43頁)
- 41)~42)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 45・46頁)
- 43)YAHOO! JAPAN知恵袋
(<http://chiebukuro.yahoo.co.jp/>)
- 44)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 47頁)
- 45)「日本の祭り 知れば知るほど」(2007年菅田正昭、株式会社実業之日本社 50頁)
- 46)~47)「日本人のしきたり」(2003年飯倉晴武編著、青春出版社 104・181頁)
- 48)「日本人 数のしきたり」(2007年飯倉晴武編著、青春出版社 77頁)
- 49)「日本人のしきたり」(2003年飯倉晴武編著、青春出版社 96頁)
- 50)「建築工事の祭式」(2001年「建築工事の祭式」編集委員会、学芸出版社 96頁)

参考文献

- ・「イベント研究第3号」日本イベント総合研究所
2010年一般社団法人日本イベントプロデューサー協会

- ・「日本の祭り 知れば知るほど」菅田正昭著
2007年 株式会社実業之日本社
- ・「建築工事の祭式」「建築工事の祭式」編集委員会編著 2001年 株式会社学芸出版社
- ・「決定版 知れば知るほど面白い！神道の本」三橋健著 2011年 株式会社西東社
- ・「日本人数(かず)のしきたり」飯倉晴武編著
2007年 株式会社青春出版社
- ・「日本人のしきたり」飯倉晴武編著 2003年 株式会社青春出版社